

Statius, *Thebais* 12.536 oblique の意味と解釈

山田哲子

スターティウス『テーバイス』12巻では、テーセウスがアマゾーンの国を征服して凱旋する様子がローマ風の凱旋式として描写されている。しかし、捕虜として見世物になっているはずの蛮族の女王ヒッポリュテは、文明的な身だしなみを整え美しく装い、テーセウスの正妻然として彼に寄り添っている。その様子を見てアテナイの女たちが驚く様子に、oblique という語が用いられている。本稿の目的は、この単語の正確な意味とそこに込められたニュアンスを明らかにすることである。

まず、問題とする単語を含む文脈全体を概観するために、テキスト本文を以下に引用する。

ipsae [= Amazones] autem nondum trepidae sexumue fatentur,
nec uulgarē gemunt, aspernanturque precari, 530
et tantum innuptae quaerunt delubra Mineruae.
primus amor niueis uictorem cernere uectum
quadriiugis; nec non populos in semet agebat
Hippolyte, iam blanda genas patiensque mariti
foederis. hanc patriae ritus fregisse seueros 535
Atthides *oblique* secum mirantur operto
murmure, quod nitidi crines, quod pectora palla
tota latent, magnis quod barbara semet Athenis
misceat atque hosti ueniat paritura marito.

この oblique という単語に関するこれまでの解釈、すなわち Mozley や Shackleton Bailey (以下 SB) の翻訳や、辞書に記載された意味は、それぞれ異なっており、意見が分かれているのが現状である。

まず Mozley は、sidelong gaze と訳している*1。原文と英訳を対比すると、oblique と operto murmure が With hushed whispers and sidelong gaze と並列して訳されており、「斜め」であるのは視線の向きだけに限定されているのがわかる。それに対して SB の訳では、単に aside と訳されているだけで、必ずしも視線の向きを表しているとは限らない*2。む

*1 With hushed whispers and sidelong gaze the Attic dames marvel that she has broken her country's austere laws, that her locks are trim, ... J. H. Mozley, *Statius II* (Loeb) London, 1989.

*2 Aside among themselves the women of Athens mutter, wondering that she has broken the austere usages of her country in that her hair is sleek and her bosom all covered by her mantle, ... D. R. Shackleton Bailey, *Statius III*

しろ mutter や wonder の語と結びついて、発言が直接的ではなく「斜め」つまり「遠回しな発言」を意味しているとも考えられる。

しかし OLD では、(視線をスピーチから分けた上で) 斜めなのは視線であると記載されている*3。しかも形容詞 obliquus の項目では、「正直さの欠如」を表しているともされている*4。一方 TLL では、OLD のようにスピーチと視線は区別されておらず、「曖昧な」「遠回しな」という意味とみなされ、そこにはしばしば悪意が含まれている、とも説明されている*5。したがって TLL の解釈では、『テーバイス』のこの部分に関しても、「見る」という動作ではなく、「ささやく」あるいは「驚く」という発話行為と結び付けて、「遠回しに非難する」の意味にとっていると考えられる。また、OLD のように発言をためらうといった消極的な態度だけではなく、もっと意図的な「悪意」などの積極的な感情が言及されていることにも注意する必要があるだろう。

このように、この箇所において「斜め」であるのは視線ではなく発話行為であり、「遠回しに非難する」という意味に解釈することも可能である。しかし、ここでの文脈が全体として「テーセウスとヒッポリュテーが人々の注目を集める」というものである以上、問題になるのは視線であって、発話行為とは考えにくい。また、『テーバイス』において oblique または obliquus が、非難や悪意であるか否かを問わず、発話行為と結びついて用いられる例は見られない。さらに、mirantur, murmure という語そのものが明確な対象を持つ発話行為とは言い難い上に、secum mirantur, operto murmure のどちらもすでに行動の対象へと直接向いてはおらず、それ以上に「遠回し」になりようがない。したがって、本稿では oblique という語は視線と結びついているという前提に立った上で、「視線が斜め」というのは具体的にどのような動作なのか、またそこにはどのような感情が表現されているのかを考察する。

英語における sidelong gaze が具体的にどのような視線を意味するのか、日本語で言う「斜^{はす}に見る」や「横目で見ると」などの表現と同じに考えて良いのか、だとしたらその表現は具体的にはどのような行為を意味するのか、またそのニュアンスはどのようなものなのか、難しい問題があるが、ここではまず類似する表現として、『テーバイス』1.675 obliquare oculos の用例を見てみよう。ポリュネイケースが自らの恥すべき出自をアルゴスのアド

(Loeb) London, 2003.

*3 oblique : 1. slantwise, at an angle, obliquely 2. (of speech etc.) By implication or suggestion, indirectly b. with sidelong glance.

*4 obliquus : 4. (of glances) Sidelong (usu. implying lack of frankness or sim.)

*5 oblique. 1. proprie: 2. translate: a. usu sollemni i.q. per ambages, modo ambiquo vel non aperto (saepius animo maligno, hostili...)

ラーストス王に語らざるを得ない状況に置かれた時の態度である。ここで用いられているのは *obliquo* という動詞であるが、表現されているのは「視線を相手から逸らす」という動作であることは明確であり、うしろめたさのために返答をためらっている状況を表していることは間違いない*6。

「視線を相手にまっすぐ向けられない」という態度が、うしろめたさの感情の表れだと考えることは、現代のわれわれの感覚に照らしても自然なことであるし、『アウリスのイーフィゲネイア』321 の例からも確認することができる*7。「視線を向ける」という行為は、もちろん何かを視認することを第一義としているが、それだけではなく、様々な心理や感情の表出としても用いられているのである。

そこで、ここではまず「斜めの視線」を「相手から視線を逸らす」という意味と仮定して、*oblique* に類する語と視線の関係における用法を検討してみることにする。

『テーバイス』における *obliquo* という動詞の用法に注目してみると、視線に限らず何かを「逸らす」という意味で用いられていることがわかる。例えば、8巻682行では、投げつけられた槍を叩き落として狙いを逸らす、という文脈で用いられており*8、12巻749行においては、自分の乗っている馬の進路を脇に逸らせる、という文脈で用いられている*9。したがって、*obliquo* という動詞は、槍や馬のように本来は直進していくはずのものが何らかの理由で軌道を逸れて目標とは別の方向に行ってしまう、という動作を表していることになる。これを視線にあてはめてみれば、本来は相手をまっすぐに見ているはずなのに、何らかの理由のためにその視線を対象から逸らしてしまう、という動作を表していることになる。

しかし、副詞の *oblique* や *obliqua*、あるいはそれに類する形容詞 *obliquus* などが「目」「視線」などの語と結びついて用いられる場合には、動詞とは異なり、必ずしも視線を対象から逸らしているとは限らない。むしろ対象へと視線が固定されており、場合によっては「睨みつける」などの攻撃的な態度でさえあることがわかる。3巻377行の *obliquo lumine* などがその例にあたる*10。ここでは、ポリュネイケースが演説の中で、「自分のせいでア

*6 *deiecit maestos extemplo Ismenius heros*
in terram uultus, taciteque ad Tydea laeuum
obliquare oculos ...

*7 *μῶν τρέσας οὐκ ἀνακαλύνψω βλέφαρον, Ἀτρέως γεγώς;*

*8 *ille nihil contra, sed stridula cornus in hostem*
it referens mandata ducis, quam prouidus heros
iam iam in fine uiae percussam obliquat ...

*9 ... *ille pautes / obliquauit hasta duos* ...

*10 *non me ullius domus anxia culpet*
respectentue truces obliquo limine matres.

ルゴスとテーバイの間に戦争が起きて、戦死者たちの母親たちから憎まれるようなことにはなりたくない」と述べている。ポリュネイケースの仮想中の母親たちが、culpet, truces matres と表現されていることから、彼女らの視線はきびしい非難に満ちており、目を逸らしているわけではないことがわかる。

このことはスターティウス以外の用例からより明確となる。

アープレイウス『黄金のロバ』25 には obliquum respiciens という表現があるが*11、これはロバに姿を変えられてしまった主人公が、その原因となった下女フォーティスに対して必死に訴えかけている (expostulabam) ところである。口もきけず身振りすら使えない状況で、訴える手段は「視線」しか残されていない、という文脈であるから、対象から視線が逸れているわけではないことは明らかである。また、ためらいやうしろめたさなどの感情が生じる必然性もない。

さらにセネカ『テュエステース』706 では、アトレウスが兄弟の子供を祭壇で殺す場面で、toruum et obliquum intuens という表現が出てくる*12。あまりの非道な所業に周囲が天変地異で揺れ動いている中でもアトレウスのみ動じることなく祭壇に向かって立っており、その視線もまた揺らいでいるはずはなく、「目を逸らす」という動作ではありえない。そこに込められた感情も、ためらいやうしろめたさではなく、兄弟に対する強い憎悪、あるいは神々に対する挑戦であると考えることができる。

このように見てくると、動詞としての obliquo は「逸らす、方向を変える」という意味であり oculos を目的語とすれば「目を逸らす」という意味になるが、形容詞とそれから派生した副詞の場合に「目・視線」という名詞や「見る」という動詞と結びついた場合は、視線の方向や対象は変わっているわけではないので、全く別の動作（または態度）を表していることがわかる。またそれを引き起こす感情は、対象を直視することを回避したいという消極的な感情ではなく、悪意や敵意などの攻撃的な感情に由来することがわかる。（これは、前述した TLL の記述とも合致する。）したがって、ここで問題とする oblique が表しているはずの「斜めの視線」に対しては、「視線が対象から逸れている」以外の説明を必要とすることになる。

*11 Ac dum salutis inopia cuncta corporis mei considerans non avem me sed asinum video, querens de facto Photidis sed iam humano gestu simul et voce privatus, quod solum poteram, postrema deiecta labia umidis tamen oculis oblicum respiciens ad illam tacitus expostulabam.

*12 Mouere cunctos monstra, sed solus sibi
immotus Atreus constat, atque ultro deos
terret minantes. Iamque dimissa mora
adsistit aris, toruum et obliquum intuens.

『テーバイス』における他の（上述の 3.377 以外の）用法も同様に、「相手から目を逸らす」以外の説明が必要となってくる。I 巻 447 行の *obliqua tuentes*、4 巻 606 行の *tuens obliqua*、10 巻 887 行の *obliquo respectans lumine* のように、「目」または「見る」という語と結びついた場合には、相手から視線が逸れているのではなく、視線に何らかの変化が生じており、それによって悪意や敵意または非難などのネガティブな強い感情が表現されている、と解釈した方が妥当と思われる。問題の箇所である *oblique* という副詞も、*obliquo lumine* と同じにとるか、あるいは動詞 *mirantur* を「見る」という意味の動詞であるとみなすならば、アテーナイの女たちはヒッポリュテーに対する視線を逸らしていないと考えることができる。そもそもアマゾーンの女王はアテーナイの女たちの注意を最初から集めており、彼女らはその捕虜を見ることに遠慮なり躊躇なりを感じる必要のない立場であり、その視線が外れたり揺らいだりする理由はない。

では、視線が相手から逸れてはいないが「斜め」になっている、というのは具体的にどのような状況を示していると考えられるだろうか。すでに挙げた『テーバイス』において *oblique* およびそれに類する語が「目」または「見る」という語と結びついた場合を検討してみよう。まずは上述の「見る」という単語と結びついた例として、(1) *obliqua tuentes* (I.447)、(2) *tuens obliqua* (4.606)、(3) *obliquo respectans lumine* (10.606)、さらに「目」（または「顔」）と結びついた例として、(4) *uultum obliqua madentem* (3.266)、この 4 つを検討する。

(1) I.447 *obliqua tuentes**13

嵐の中を潜り抜けてようやくアルゴス王アドラーストスの館の前にたどり着いたポリュネイケースは、たまたま同じ時・同じ場所にやって来たテューデウスと鉢合わせし、避難場所を巡って突然の乱闘を引き起こす。騒ぎを聞きつけたアドラーストス王が館の内からあらわれて両者を引き分け乱闘の次第を問いただすのに対し、まだいきり立っている二人が示す反応の一つがこの *obliqua tuentes* である。全体としては、穏やかに諫める老王に対して興奮状態の若者たち、という対比が認められる場面である。*mixto clamore, turbatis uocis amarae confudere sonis* などの表現から、まだ二人の若者が興奮状態にあり互いに戦意に燃えていることがわかる。二人の視線が向けられている先は、諫めようとしているア

*13 *uix ea, cum mixto clamore obliqua tuentes incipiunt una: 'rex o mitissime Achium, quid uerbis opus? ipse undantes sanguine uultus aspicias.' haec passim turbatis uocis amarae confudere sonis;*

ドラーストス王である可能性もあるが、mixto clamore と obliqua tuentes が対になっていることを考えると、叫び (clamore) の対象と同じく、戦っている相手と考えることができよう。二人の「声」につけられた修飾語は、amarae 「苦い」であり、mixto, turbatis など「混乱している」である。「苦さ」は相手に対する敵意や憎悪を意味し、「混乱」に関しては、本人の精神状態が興奮のために混乱し理性を失っている心理的状态ともとれるし、両者の声が互いに錯綜しているという外的状況を描写しているともとれる。このような「声」の状態と「視線」が対応していると考えれば、二人の視線もまた、相手への敵意と憎悪に満ちて興奮あるいは錯綜しているとみなすことができる。ここで「混乱」を外的な「錯綜」と解釈するならば、視線の向きは相手から断続的に逸れている可能性もある。具体的に想像するならば、アドラーストス王に対して言葉と視線を向けながらも、その合間にちらちらと相手に対して険しい視線を向けていると考えることができる。日本語で言う「横目で見る」という感覚に近いかもしれない。しかし、内的な心理状態の「混乱」ととるならば、その視線も興奮したもので、日本語で言う「血走った眼」などを想像することができるだろう。

そして、後者のような視線の「険しさ」や「とげとげしさ」などを表現するために、従来は用いられていなかった「斜め」という語を、白銀時代の詩人であるスターティウスがわざわざ選んだ、という可能性もあるのではないだろうか。ちなみに、スターティウスが影響を強く受けていると考えられる『アエネーイス』では、oblique またはそれに類する副詞・形容詞・動詞の用例は全部で 3 例しかなく、「見る」あるいは「目」と直接に結びついているものは一つもない*14。(類似する表現として auersus が視線と結び付けて用いられている例はあるが、これに関しては後述する。) それに対して、スターティウスとほぼ同時代のセネカの悲劇においては、全部で 7 例あり、そのうち「見る」または「目」と結び付けられている用例は、『オエディプス』339、『テュエステース』160、706 の 3 例である*15。

また、攻撃的な視線を表す表現として、叙事詩の伝統の中ですぐに想起される例としては、『イーリアス』1.148 や 22.260 などの ὑπόδρα ἰδών があるが、これも「見る」という動詞と、何らかの方向や角度を表す語が組み合わされることによって、相手に対する強い敵意が表現されているものである。この表現も、ὑπόδρα 「下から」という語が何のどのような方向を表しているのか、「眉の下から (上目づかいに) 見る」ことなのか、あるいは「斜^{はす}に見る」ことなのか、具体的には不明瞭な点が残るが、用いられている文脈から、「ため

*14 ただし、11.337 の obliqua inuidia という用例では、擬人化された「嫉妬」の名前に「見る」という言葉が隠されており、何らかの形で「斜めの視線」が含意されている可能性もある。

*15 ただし、すでに挙げた『テュエステース』706 以外の 2 つはどちらも、「目」を目的語とする動詞 obliquo であり、「視線を逸らす」という意味で用いられている。

らって目を逸らす」という意味ではなく、相手に対する敵意と視線の強さと鋭さが表現されていることは間違いない。

先行作品を踏まえつつ新奇な表現を取り入れるのは、白銀時代の詩人であるスターティウスの特徴でもある^{*16}。したがって、*oblique*（およびそれに類する語）が表現するのは、視線の鋭さや敵意の強さであって、必ずしも視線の方向や角度などの具体的な表現ではない、という可能性も出てくるのではないか。

(2) 4.606 *tuens obliqua*^{*17}

ここでは、テイレシアースの術によって冥府から呼び出されたラーイオスの亡霊が、孫であるエテオクレースを認識し、彼の捧げた供物を拒否するという場面である。エテオクレースは（その父であるオイディプースと異なり）ラーイオスの死に直接の責任があるわけではないが、それでもこの呪われた一家の祖父は孫に対して消えることのない憎悪を抱いていることが描写されている。したがって、ラーイオスの抱く感情がためらいや遠慮ではないことは明らかである。また、*inops comitum* および *non cetera ceu plebes* などの表現から、ラーイオスが他に呼び出された亡霊の一群とは距離を置いていることがわかるが、これは同時に、冥界の霊から助言を得たいと望んでいるエテオクレース自身からも距離を取りたいというラーイオスの気持ちをあらわしているとも考えられる。もちろんその距離感は、遠慮や躊躇ではなく、相手の望みに応えたくないという拒絶のあらわれである。

このように相手に対する拒絶を示すために、ラーイオスが視線を完全に逸らしているという可能性ももちろんある。たとえば『アエネーイス』6.469で、冥界でアエネーアースが出会ったディードーの亡霊が、彼の訴えを受け入れることなく視線を地面に向けたまままでいたように（ここでは *auersa* という語によって彼女の拒絶の感情と顔をそむける仕草^{*18}とが表現されている）、ラーイオスもまたエテオクレースの供え物を一顧だにせず視線を背けていたと考えられないこともない。しかし「(エテオクレースを) 顔でわかったので」という文が直後にあり、ラーイオスが孫の顔に視線を向けたことが表現されている

^{*16} Vessey は、Curtius の提唱する概念を用いて「マニエリスム」と評している。D. W. T. C. Vessey, *Statius and the Thebaid*, Cambridge (1973), p. 10.

^{*17} *stabat inops comitum Cocytii in litore maesto*
Laius, inimici quem iam deus ales Averno
reddiderat, dirumque tuens obliqua nepotem
(noscit enim uultu) non ille aut sanguinis haustus,
cetera ceu plebes, aliumue accedit ad imbrem,
immortale odium spirans.

^{*18} ただし、同じ *auersa* という語が必ずしも「顔をそむける」という意味で用いられていない例が 4 巻 362 行に存在する。

以上、他に何の補足説明もなしに「顔をそむけた」と理解するのは難しいのではないか。『アエネーイス』6巻の例でも「地面に視線を固定して」という明瞭な説明がある*19。

また、他の霊たちとは距離を置いていることから、その霊たちと正対しているエテオクレースに対してラーイオスは側面方向から視線を注いでいるという可能性もないではない。こう考えればラーイオスとしてはまっすぐに視線を向けていても、三者の位置関係からは、エテオクレースに対して視線が斜めである、とすることができる。しかし、白銀時代の典型的な詩人であるスターティウスには、具体的で正確な位置関係を説明するのは少ないという傾向がある。したがって、やはりここでの「斜め」というのは、視線をどこに向けているかという身体的表現ではなく、憎悪と拒絶というラーイオスの精神状態を反映していると考えるのが妥当であろう。

なお、ラーイオスの場合と同様にディードーの「拒絶」を表していると思われる *auersus* という語は、*obliquus* と同じような問題点を持っている。まず、『アエネーイス』4.389における、*seque ex oculis auertit* のように、動詞の場合には何かを「逸らす」「そむける」という意味になる。そして完了分詞または形容詞としての *auersus* は、前述の『アエネーイス』1.482や6.469のように、「顔（または目）をそむける」という意味にもなる。しかし、同書4.362では、同じように *auersus* という語が使われていながら、Coningtonの注*20では *she looks at him askance*, となっており、Loebの訳(Fairclough*21)でも *she gazes on him askance* となっており、視線や顔の向きを完全にそむけているわけではなく、なんらかの意味で「斜めに見る」という状態であることがうかがわれる。

くわしく見てみよう。同書6.469でディードー（の亡霊）は、*illa solo fixos oculos auersa tenebat* と描写されている。これは、同書1.482で女神アテーナー（の神像）がトロイアの女たちの嘆願を拒絶している箇所の *diua solo fixos oculos auersa tenebat*. とまったく同じ表現である。これらの表現では、視線が相手ではなく地面に固定されていることから、「目を逸らす」という状態を表していることはまちがいない。しかし、4.389においては、ディードーは *auersa tuetur* でありながら、*huc illuc uoluens oculos totumque pererrat / luminibus tacitis* と表現されているように、相手の全身に視線をさまよわせている*22。すなわち、6

*19 *illa solo fixos oculos auersa tenebat*.

*20 Conington, 4.362 *she looks at him askance, but keeps her eyes on him nevertheless*.

*21 H. R. Fairclough, *Virgil I* (Loeb) London, 1996.

*22 *Aen.* 4.362–7 *Talia dicentem iam dudum auersa tuetur*

huc illuc uoluens oculos totumque pererrat

luminibus tacitis et sic accensa profatur:

‘nec tibi diua parens generis nec Dardanus auctor,

perfide, sed duris genuit te cautibus horrens

巻のディードーはアエネアースから完全に視線を逸らせているのに対し、4巻のディードーは間違いなくアエネアースに視線を向けているのである。同じ *auersa* という語でも、6巻の場合には「目」を目的語とする動詞 *auerto* と同様に「視線を逸らす」の意味となり、4巻の場合には視線は逸らされるのではなく相手に向けられており、しかも相手に対する強い非難の感情がこめられていることが、*accensa* という語 (363) や *perfide* (366) という呼びかけなどからもうかがえる。また、Conington の注などでは *askance* と説明されているが、これが表現しているのは正面から相手を見るのではなく顔をわずかに傾けて視線を投げかける、という仕草であるとも考えられるが、同時に、あくまでも比喩表現であって実際には顔の角度が変わったわけではない、と考えることも可能である。そもそもディードーの実際の視線の向きは、*huc illuc uoluens oculos* と、忙しく動き回っていることがすでに明示されている。したがって、*auersa* は視線の向きではなく、相手に対する感情、それも、男の不実をなじる攻撃的な気持ち、引き留めたいと思う執着の気持ち、相手の逃げ口上を受け入れたくない拒絶の気持ちなど、強烈で相反する感情が渦巻き揺れ動いている様を表現しているとも考えられる。

このように、視線の向き、そこにこめられた感情など、*oblique, obliqua* (およびそれに類する語) と共通する点が多い。そのことを踏まえて、『テーバイス』4.606におけるラーイオスの *tuens obliqua* について再び立ち帰ってみよう。冥界で出会った敵対的な亡霊、という意味では『アエネーイス』6巻のディードーと同じであるから、ラーイオスもまた彼女と同様に視線を逸らしているのかもしれない*23。しかし、6巻のディードーとここでのラーイオスとの根本的な相違は、前者が沈黙を貫くのに対し、後者は求めに応じて口を開き、相手の望む予言を与えている、ということである。すなわち拒絶は決定的なものではなく、相手をシャットアウトすることよりも、相手に敵意と非難をぶつけることの方が優先されている。その意味ではやはり4巻のディードーに近いと考えられる。ラーイオスの視線もまた、相手から逸らされているのではなく、むしろ敵意に満ちた視線を強く向けており、*obliqua* という語は、その敵意や拒絶などのネガティブな感情を表している、と考えるべきだろう。

Caucasus Hyrcanaeque admorunt ubera tigres.

*23 *Theb.* 614 でティレシアースが彼にかける *quos, miserande, fugis?* という言葉は、*Aen.* 6.466 でアエネアースがディードーに語りかける *quem fugis?* を連想させる。

(3) 10.887 obliquo respectans lumine*24

10 巻では、カパネウスがテーバイの城壁に登り致命的な一撃を加えようとするだけでなく、そのまま天上に攻め寄せんとする勢いであることが描写されている。これに対して怒りと不安を抱く神々のうちでもとりわけバックスはテーバイと縁が深い神であることから、カパネウスを雷で打ち滅ぼすようにとユピテルに迫る。この時のバックスの視線が obliquo lumine である。視線と行動の方向は、バックスからユピテルに直接に向いており、そこには拒絶や憎悪などの感情はないし、不信感による距離感もない。父である全能のユピテルに対する畏敬や遠慮という可能性もなくはないが、それにしては、これに続くバックスの言葉はあまりに直截である。ユピテルがかつて（騙されたとはいえ）残酷にも自分を母セメレーの胎もろとも雷で焼き殺そうとしたことを *saeua manus, mea cunabula flammae* という言葉で言及しており、*gemit* と表現されていても実態は嘆願というより非難や難詰に近い。したがって、視線が相手から逸れたり揺らいだりするとは考えにくい。対象に視点を合わせた上で、なんらかの「斜め」のニュアンスが入っているのであろう。

ここでは、ユピテルの正妻であるユーノーの存在が言及されている。バックスを主語とする文章の中に絶対的の尊格として *inseruante nouerca* という表現が挿入されていることから、ユーノーの視線がバックスの言動と密接な関係があることが想像される。*inseruo* という動詞は、OLD にはスターティウスの用法しか載っていない珍しい単語だが、「観察する」の意味の *seruo* に接頭辞 *in* をつけて意味を強めていると思われる。ユーノーの視線がどこに向けられているのかは明記されていないが、*nouerca* 「継母」というバックスを主体とした関係で表現されていることから、やはり視線はバックスに向けられていると考えるのが妥当であろう。だとすれば、この視線は好意的なものではありえず、憎悪とまではいかなくとも不快や不興をあらわしていると思われざるを得ない。また、ここではユピテルの視線についても言及されている。テーバイ側とアルゴス側をそれぞれ応援する神々が慌てふためく中をユピテルだけが超然として自分と周囲とを眺めている*25。ユーノーはバックスを無言でじっと観察し、バックスはユピテルに「斜めの視線」を向けつつ直截な

*24 iamque Iouem circa studiis diuersa fremebant
Argolici Tyriique dei; pater, aequus utrisque,
aspicit ingentes ardentum comminus iras
seque obstare uidet. gemit inseruante nouerca
Liber et obliquo respectans lumine patrem:
'nunc ubi saeua manus, meaque heu cunabula flammae?
fulmen, io ubi fulmen?' ait.

*25 aequus utrisque / aspicit, seque obstare uidet ...

非難の言葉をぶつけ、そしてユピテルは自身を含めた全てを超然と眺めている。三者の視線は交わることはなく、それぞれバラバラである。三者の視線が三種類のバリエーションを表しているのだとしたら、ユーノーの無言の観察とユピテルの超然たる無視に対して、バックスの視線は、自分の気持ちが相手の心に響かないことへの苛立ちの気持ちを表しているのではないだろうか。具体的には、恨みがましい目つき、あるいは上目づかいに見る、などが想像できるかもしれない。

このような「目つき」の変化は、顔の向きをわずかに変えることによって生じる（例えば「上目づかいに見る」という仕草は、顔をわずかに伏せることによって実現される）と考えることもできるので、「斜め」というのは、そのような顔の向きを表現しているという可能性もある。しかし、この場面では、バックスがどちらの方向を向いているのかという具体的な状況よりも、ユピテルに対する非難や訴えかけなどの内面の状態の方に重点が置かれていると考えるべきではないだろうか。

(4) 3.266 uultum obliqua madentem*²⁶

ユピテルの命で戦争を起こすべくマルスが出陣しようとしているところをウェヌスが止める場面で用いられる表現である。SB はここを with tearful face turned to one side と訳しており、uultum を「顔」ととった上で、obliqua を「そむける」という意味での「斜め」と解釈している。一方 Mozley は with sidelong tearful glance と訳しており、uultum を「目」ないし「視線」ととった上で、obliqua を「斜め」という意味に解釈している。Mozley の訳だと、ウェヌスの視線は、決してまっすぐにみつめているわけではないが、なんらかのニュアンスを伴いながらも全体としては相手に向けられているということになる。（具体的に想像するならば、日本語で言う「上目使いに見る」「流し目で見える」など、愛人に対して訴えかけるような視線を送ったとも考えられる。）それに対して、SB のように顔をそむけてしまうと、ウェヌスの視線はマルスから完全に逸らされてしまい、彼女は彼を全く見ていない、ということになる。しかしこの場面ではウェヌスは、逸り立つ駿馬の前に恐れることなく歩を進め、出撃せんとする戦車に自分の胸を押し当てるという、きわめて積極的な態度をとっている。女神の意図はマルスを止めることであり、しかも自分にはそれが可能であるという確信を持っている。nulla formidine「恐れ気もなく」という表現からも

*26 cum Venus ante ipsos nulla formidine gressum
figit equos; cessere retro iam iamque rigentes
suppliciter posuere iubas. tunc pectora summo
adclinata iugo uultumque obliqua madentem
incipit (interea dominae uestigia iuxta
spumantem proni mandunt adamanta iugales):

それは明らかであるし、何よりも叙事詩の伝統として、「出陣しようとする神（神々）が寸前で阻止される」という場面であることは当然のこととして了解されている*27。また、「なにものも抗うことのできない愛の力」であるウェヌスが、単純で直接的な暴力であるマルスを屈服させることもまた、文学的な共通了解とすることができる。ウェヌスの立場は「非力な女性」という弱弱しいものではなく、むしろ圧倒的な優位にある（マルスの神馬が恭順の仕草を見せることも、女神の優位性を強調している）。したがって obliqua の意味する動作がどのようなものであれ、そこに込められた感情は、ためらいや躊躇であるはずはない。むしろ、pectora summo adclinata iugo と uultum obliqua madentem を一対の表現と考えるならば、どちらも女神の積極的な態度を示しており、obliqua は adclinata に対応して、「前方に傾斜する」という積極的な意味に取ることもできるのではないか。具体的な動作としては、相手に対して圧倒的な力をふるう武器である「目」または「顔」をウェヌスはマルスに向かって突きつけた、と考えられるのではないだろうか。

またここで女神の顔（または目）が涙にぬれていることが言及されているが、『アエネーイス』1.227 以下でウェヌスがユピテルに嘆願する場面や、『テーバイス』7.151 以下でバックスがユピテルに嘆願する場面でも、それぞれ嘆願者は涙を流していることが描写されている*28。このような涙は嘆願の場面にはつきものであり、相手に対する積極的なアピールの手段だとも言える。ここでのバックスのように、嘆願するためにわざわざ自分の身なりを見苦しくして自分の不幸な状況をアピールし相手の気持ちを和らげようとする例は、『イーリアス』22.77 でブリアモスがヘクトールに嘆願する場面にも見られる。涙が積極的なアピールである以上、その顔（または目）を相手から逸らす必要はないし、「斜に構える」必然性もないはずである。

以上、4つの例を検討した。このように見てくると、視線が「斜め」だという場合、様々な可能性が考えられるが、全てにおいて共通するのは、実際には相手に視線をまっすぐ向けている可能性を完全に排除することはできない、ということである。さらにそこに込められた感情としては、憎悪や非難などのネガティブなものばかりである。ラーイオスやポ

*27 *Ilias*, 8.381–437.

*28 *Theb.* 7.151–154 ergo ut erat lacrimis lapsoque inhonorus amictu
ante Iouem (et tunc forte polum secretus habebat)
constitit, haud umquam facie conspectus in illa
(nec causae latuere patrem), supplexque profatur:
Aen. 1.227–229 Atque illum talis iactantem pectore curas
tristior et lacrimis oculos suffusa nitentis
adloquitur Venus ...

リュネイケースのように強烈な憎悪と敵意を露わにしている場合はもちろん、ボックスやウェヌスのように決して敵対関係ではない場合でも恨みがましい非難の感情は明らかである。『テーバイス』以外の用例として挙げた『黄金のロバ』の主人公や『テュエステース』のアトレウスも、後者は強い憎悪、前者は（憎悪とまではいかないが）恨みや非難の感情を抱いている。しかもその感情は、ためらいなどの消極的なものではなく、積極的に相手に訴えかけるものである可能性が高いこともわかる。

このような強い感情を表現する手段として、表情や目つきの変化に言及することは、古典古代においても自然なことであろう。仮に視線そのものは同じように相手に向いていても、好意的な視線と敵意に満ちた視線では、その目つきは全く異なっているはずである。そのような変化を表現する際、例えば日本語の「険しい」という語が、斜面などの物理的な角度を表すだけでなく、表情や心情の鋭さを表すことができるように、「斜め」*oblique*, *obliqua* という語がそれを比喩的に表すことも可能ではないだろうか。

auerto という語を例にとれば、動詞 *obliquo* と同様に本来は「逸らす」という意味であり、そこから派生した *auersus* という語も「顔（または目）をそむける」という意味になりうるが、同時に『アエネーイス』4.362のように、完全に逸れるのではなく「斜め」の状態を意味することもある。さらに『アエネーイス』2.170では「女神の心がギリシャ軍から離れた」という意味で *auersa deae mens* という表現が用いられている。ここでは、本来は実体を持たない「心」があたかも（目や顔のように）具体的な方向性を持つものであるかのように描写されているが、これは一種の比喩表現とみなすべきであり、実際に表現されているのは「敵意を抱く」などの心情である。さらに『テーバイス』10.71では、ユピテルがアルゴス勢（とそれを味方するユーノー）に対して敵意を持っていることが、ユピテル本人にかかる修飾語として *auersus* という語を単独で用いることによって表現されている*29。このように、本来は「向きを変える」という具体的・身体的な表現である語が、心理や心情を表現する語として用いられる例は存在している。したがって、ここで問題としている「斜め」を意味する語 *oblique*, *obliqua*（およびそれに類する形容詞など）も、身体的な方向や角度だけではなく、感情の強烈さや対象への強い傾斜などの心理的状況を表現している、という可能性は十分に考えられるのではないだろうか。

以上の検討を踏まえて、本稿で問題とする『テーバイス』12.536の箇所に戻ろう。アテーナイの女たちはヒッポリュテーに対して具体的にどのような視線を送っているのだろうか。

まず確認したいことは、*primus amor ... cernere* (532), *nec non populos in semet agebat /*

*29 *Theb.* 10.70–I *scit Fata suis contraria Grais / auersumque Iouem ...*

Hippolyte (533-4), mirantur (536) などの表現から、ヒッポリュテーを「見る」ことは人々の欲求するところであり、決して拒絶や忌避の感情を抱かせるものではない、ということである。すでに述べたように、戦勝国の民であるアテーナイの女たちにとって、捕虜であるヒッポリュテーの姿を見ることに躊躇やためらいを覚えるはずはない。また、顔をそむけたり「斜に眺める」ような嫌悪感や拒否感をおぼえているほどでもない。蛮族の女王の装いに驚いているほどであるから、断続的にちらちらと横目でうかがっているとも考えにくい。やはり視線の向きそのものはまっすぐに相手に向けられており、「斜め」という語で表現されているのは、その視線や目つきに込められた感情の歪みなのではないだろうか。

では、その視線にこめられたネガティブな感情はどのようなものなのか。537 行から 538 行で描写されるヒッポリュテーの姿について、535 行では *patriae ritus fregisse seueros* と表現されている。有名なアマゾーンのいでたちは、差別的な意味での「蛮族風」ではなく「(彼女の) 祖国の厳格な掟」であると述べられ、これを破っている彼女は決して肯定的には描写されていない。それに対して 529-531 においてヒッポリュテー以外のアマゾーンは、敗者でありながら見苦しく命乞いすることなく毅然とした態度をとり純潔を守っているとして、肯定的に描かれている。これと対比することで、征服者との婚姻を受け入れて恥じる様子もないヒッポリュテーは、女性たちから否定的な評価を受けていると考えられる。

また、538-9 では、*magnis quod barbara semet Athenis / misceat* 「蛮族の女の身でありながら偉大なアテーナイ人たちに混じる」とあり、異国の女王が自国の王妃となることに対して拒否反応が示されていると考えられる。これは、ローマ人にとってのクレオパトラのような立場ではないだろうか。しかも、『テーバイス』が書かれたフラウィウス朝においては、皇帝ティトゥスがユダヤの王女ベレニケを妻として遇したことがローマ市民の反感を買った、というエピソードがディオ・カッシウスによって伝えられている。このことから類推すると、ヒッポリュテーの存在のみならずテーセウスとの婚礼そのものが、非難の的となっていると考えることもできる。

さらに、アテーナイの女たちの非難の視線は、婚礼を望んだテーセウス自身にも向けられていると考えることができる。『テーバイス』では権力者は否定的に描かれる傾向にあるが^{*30}、最後に戦いを終わらせることになるテーセウスの評価に関しては、様々な意見がある。理想的な君主として描かれているという意見もあるが^{*31}、問題の解決を武力に訴えることしかできないという点では他の君主たちと大きく変わるところはない。なにより

*30 山田哲子、「詩人と皇帝——『テーバイス』の中にドミティアヌスは描かれているか——」,『成城文藝』185 (2004) 122-127.

*31 Vessey, *op. cit.* (n. 16) pp. 307-316.

も、ヒッポリュテの胎内にはすでに子供が宿っていることが二度も言及されており*32、やがてヒッポリュトスの悲劇（義理とはいえ母親と息子との近親相姦や、息子を呪い殺す父親など、オイディプス一家と同じ悲劇）が生じることを考えると、決して肯定的に描かれているとは言い難い。アテナイの女たちの視線は、そのような将来を予示しており、忌まわしい悲劇が決して終わらないということを表していると言えるのではないだろうか。だとすれば、彼女たちの視線を具体的に想像すると、日本語で言う「白い眼で見る」「眉をひそめる」などの否定的な態度だととらえることができるのではないか。しかもそれは決して「遠回し」な否定ではなく、もっと積極的な、強い非難のこもった険しい視線だと考えることができる。

結論として、12.536 の oblique は obliquo lumine の言い換えまたは「見る」という動作と結びついていると考えられ、実際に視線の向きが変わるというよりは感情的な歪みを表現していると考えの方が妥当であると思われる。したがって、ここで「斜め」というのは具体的な身体表現ではなく、言語上の表現である可能性が高い。そもそも、日本語で「白い目で見ると」言った時、実際に白目部分を相手に向けるということを意味するわけではない。視線の向きが変わるのではなく、相手に対するネガティブな感情の表出が「ある種の視線（または表情）」という言い回しで表現されているにすぎない。それと同じように、ここでの「斜めに見る」という表現は、一種の比喻表現であり、『イーリアス』にまでさかのぼる伝統的な「視線の強さ・険しさ」を表す言い回しが、白銀時代の詩によくあるように新奇な表現に作り直されたものだと考えるべきではないだろうか。

（成城大学）

*32 12.539 hosti ueniat paritura marito. 12.636-7 retinet iam certa tumentis / spes uteri ...